「避難スイッチ」の取り組み方（手引き）

令和２年度作成

鳥取県危機管理政策課（監修：京都大学防災研究所　矢守克也教授）

１　取組の背景と目的

近年激甚化している豪雨災害において、住民が適時適切に避難することの重要性は再認識されているところであるが、一方で、さまざまな避難に関係する情報が、必ずしも住民の避難行動につながっていないことは、全国的な課題となっている。

鳥取県においても、令和元年度「防災避難対策検討会」の提言において、各種防災情報と避難行動（判断）との結びつきが重要であることが指摘されており、それを具体化する対策として、住民が「いつ」避難するかを判断する目安（＝避難スイッチ（※））を決める取組を県下全域で進めていくことを通じて、広く県民に「避難をわがこと」とする意識の醸成を図る。

　※避難スイッチは、京都大学防災研究所の矢守克也教授らが提唱する、住民避難を促進させるための取組手法の一つであり、本県では浸水害や土砂災害など、避難のためのリードタイムがある自然災害を対象に、住民の主体的な避難を促進する有効な手法として取り入れる。

２　「避難スイッチ」決定までの手順

【第１段階】地区の基本情報を整理する。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 確認 | 整理する内容 | 整理例 |
| □ | 地区の人口、世帯構成を確認する。 | 50人、高齢化率約65％ |
| □ | 想定される自然災害を確認する。 | 浸水害 |
| □ | 想定される自然災害の影響範囲を確認する。  （実際のまちあるきでも確認する。） | 想定最大規模降雨による浸水害：  町内全域 |
| □ | 過去の被災履歴を確認する。 | 平成30年７月豪雨で、〇〇観測所で避難判断水位まで到達（越水等はなし） |
| □ | 過去の気象状況を確認する。 | 19〇〇年、△地区では観測史上１位の降水量を観測 |
| □ | 過去の記録、住民の記憶を確認する。 | 平成30年７月豪雨で、７月５日午前７時に道路の冠水を目撃した。 |
| □ | 屋外避難が必要な方の人数を確認する。 | 50人 |
| □ | 屋外避難に支援が必要な方の人数を確認する。 | 10人（後期高齢者等） |

〇想定される自然災害の影響範囲 ⇒ 市町村が発行するハザードマップで確認

※若桜町の場合【若桜町のハザードマップ】

土砂災害、浸水害が想定されるエリアが多く存在し、ハザードに対応した指定避難所もない。

　（東側のエリア：土砂災害、浸水害（八東川）、西側のエリア：浸水害（三倉（みくら）川）



〇過去の被災履歴 ⇒ 過去の気象状況のほか、住民の記録や記憶も有効

※若桜町の場合（H30.7月豪雨）【鳥取地方気象台からの提供資料】

過去の気象状況：7/5～7/6の３日間にわたって雨が降り、48h降水量は50年に１度の値。



〇住民の記憶：（例）山肌から水が噴き出していた。（若桜町地区住民）

（ポイント：身近な異変）

・役場からの情報だけに頼るのは逆に危険。「身近な異変」も重要な判断材料である。

　・過去の「身近な異変」を記録・記憶しておき、地域で共有すること。

　　※ 過去の災害での経験、印象、感想をなるべく多く思い出すこと。

※ 可能な限り写真、発生時刻を残しておく（あとで気象状況などから分析ができる）

・「身近な異変」は普段から見ておくこと記録しておくこと。

（普段の状況と「まさか」の落差を感じること）

【第２段階】避難スイッチとなり得る情報などを整理する。

（避難スイッチ：３つのポイント）

|  |  |
| --- | --- |
| ポイント | 具体的な避難スイッチの候補例 |
| 情報系 | 役場からの避難情報、気象庁からの大雨情報　等 |
| 目で見る、身近な異変 | 見慣れている状況の変化（河川水位の上昇、道路の冠水　等） |
| 人から呼びかけ | 隣人からの声かけ、ＳＮＳでの情報伝達　等 |

※地元自治体が出す避難に関する情報も、もちろん避難スイッチの一つとして活用してよいが、「避難スイッチ」づくりの取り組みでは、それだけに頼らず、自分たち独自で情報をとる、周囲の状況を見る、自らの判断で逃げる、という姿勢が大事となる。

１　避難に関する各種情報　※候補となる情報から１つに絞る。（組合せ可）

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 候補 | 整理する内容 | 情報の例 | 発出する主体 |
| □ | 気象情報 | 大雨警報 | 鳥取地方気象台 |
| □ | 気象状況（高解像度ナウキャスト） | 数時間の降雨予想 | 鳥取地方気象台 |
| □ | 避難に関する情報 | 避難準備情報  (避難所開設情報) | 市町村 |
| □ | 河川ごとの水位情報 | 避難判断水位(0.0m)に到達 | 国交省、県※河川で異なる |
| □ | 土砂災害警戒情報 | ※レベル４相当 | 鳥取地方気象台と県 |
| □ | 河川等ライブカメラの情報 | 水位の変化 | ケーブルテレビなど |
| □ | その他の情報 |  |  |

[無料イラスト] テレビとラジオで台風情報を確認する男性 ...⇒併せて、候補とする情報の入手方法を確認する。

　　［見る情報］テレビ（データ放送含む）、気象庁HP、県HP、河川ライブカメラ等

　　［受ける情報］防災行政無線、個別受信機、ラジオ、あんしんトリピーメール等

　２　目で見る、身近な異変（＝見慣れている状況の変化）※住民の記憶や記録も参考とする。

|  |  |
| --- | --- |
| 候補 |  |

３　人からの呼びかけ（避難の呼びかけ）

|  |  |
| --- | --- |
| 候補 |  |

　※誰が誰に呼びかけるか、どんな方法で呼びかけるかを決めておくこと。

４　避難先

|  |  |
| --- | --- |
| 候補 | 最善：  次善：  三善： |

（想定される避難先）

　最善：想定されるハザードに対応した、市町村の指定避難所（学校の体育館、公民館等）

　　次善：安全が確保できる、身近な民間施設、親せきや知人宅

　　三善：自宅の２階以上での屋内安全確保

【第３段階】地区での合意形成を図り、避難スイッチを決定する。

【第４段階】避難スイッチを決めたあとの取り組み



　〇検証のための避難訓練を実施する。訓練後、必要であれば避難スイッチも見直しを行う。

　　（本県で進める「支え愛マップ」づくり（市町村社協からの補助制度あり）の取組としての実施も可能）



〇地域で気になる危険箇所については、平時の状況と、異常な降雨があった際の変化、については、スマホ写真やメモ書きで残しておくこと。（⇒のちの災害に備えた判断材料になり得る）

３　その他の注意事項

〇夜間にかけての降雨予想等状況悪化が見込まれる場合は、日が暮れる前（＝行動できなくなる前）の避難行動を基本とすること。（役場からの避難情報は、明るいうちに発出される）

〇避難や避難支援に係る安否確認や情報伝達など、連絡体制をあらかじめつくっておくこと。

〇避難先までの避難ルートが安全かどうかも確認すること。